

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 第8講：近代哲学の父：デカルト   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 石川, 史郎(Ishikawa, Shirō)   |
| Publisher        |   |
| Publication year | 2018  |
| Jtitle           | 理系の西洋哲学史；哲学は進歩したか? (2018. 6) ,p.183- 202  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 慶應義塾大学工学部大学院講義ノート   |
| Genre            | Book  |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO52003003-00000000-0183">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO52003003-00000000-0183</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 第8講

## 近代哲学の父：デカルト

「理系の西洋哲学史」 目次; 他

下図のように、ガリレオとデカルトあたりから、世界記述史は本格化する。

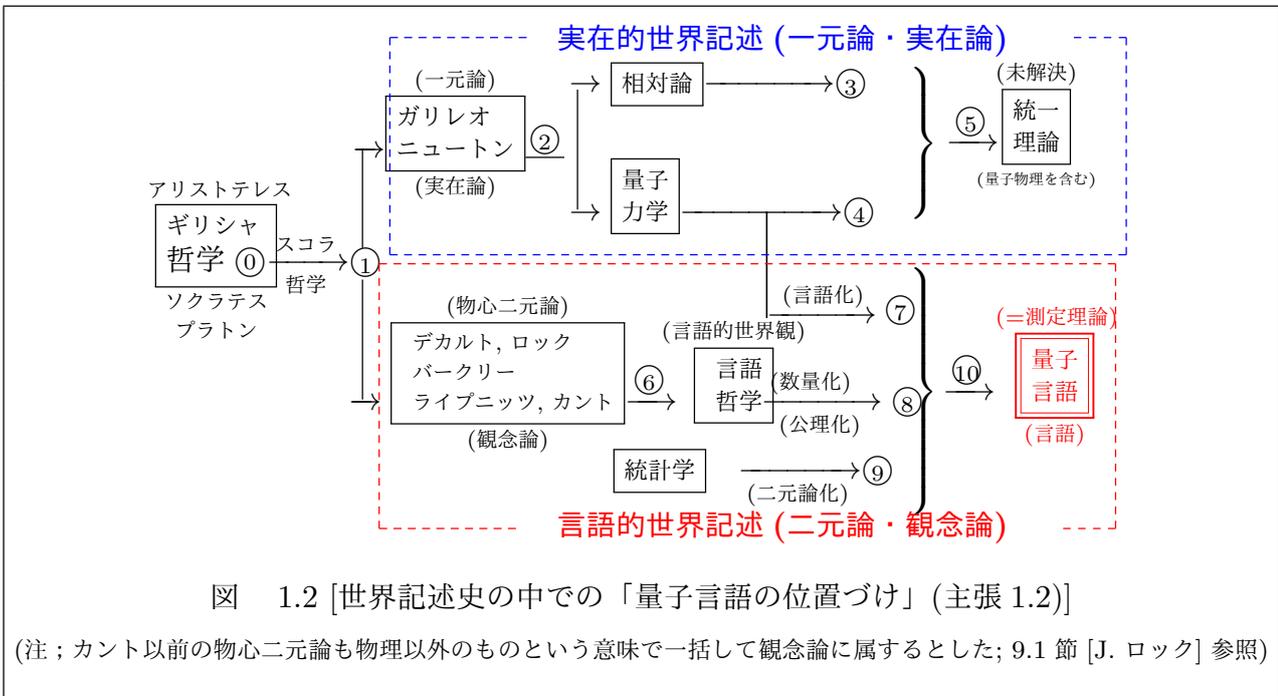
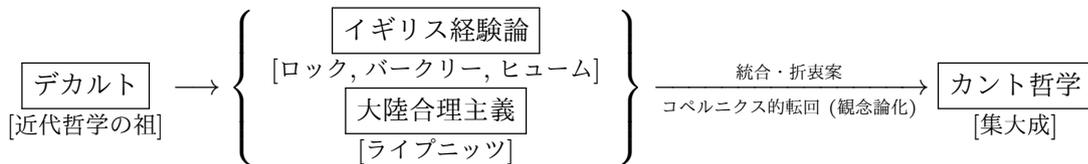


図 1.2 [世界記述史の中での「量子言語の位置づけ」] (主張 1.2)

(注；カント以前の物心二元論も物理以外のものという意味で一括して観念論に属するとした；9.1 節 [J. ロック] 参照)

次のデカルトからカントまでが近代哲学の華である。



今では考えられないことであるが、「哲学が学問の王者」と信じ込まれていて、哲学者たちが尊敬されていた時代だったのだと思う。それにしても、

- 当時のトップエリートたちが「(科学的には) 全く役に立たない空理空論」になぜ夢中になったか？

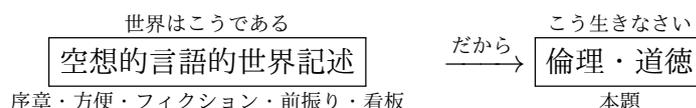
であるが、中世では神学が第一学問だったわけで、それを引きずっている部分があったとしても、, 不思議な話ではない。

本章で近代哲学の父：デカルトを、次章でジョン・ロック、バークリーを説明する。

## 8.1 コギト命題と自己言及的命題 (≈ 反コペンハーゲン解釈的命題)

### 8.1.1 イデア論の賞味期限

3.3 節で述べたように、プラトン流の哲学の語り方：



に従うならば、「倫理・道德」がメインで、「世界記述」は前座（前振り）にすぎないわけで、極論すれば、世界記述の部分は二元論的観念論の気分があれば何でもよかった（3.3.1 節）。もうすこし極論を付け足すならば、次の心理トリック：

(A) 「知識人の発言は信頼できる」とか「美人は心がきれい」とか「生真面目で堅物のカントの言うことならば信頼できる」

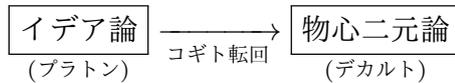
を使えば、前座の「世界記述」で知識人とか信頼に値する人と思わせればよい。前振りなのだからこの程度でもよい。

西洋哲学の本流は、プラトン流の哲学の語り方を順守した。プラトン哲学は、世界記述（イデア論）は完全におとぎ話で、本題は（ソクラテスの）倫理・道德であった。アウグスティヌスやスコラ哲学の場合、倫理・道德はもちろんキリスト教である。したがって、世界記述はキリスト教の信者たちに「なるほど」と思われような小話（アウグスティヌスの時間論「現在しか存在しない」）程度でもよかった。また、スコラ哲学では、世界記述は普遍論争「プラトンかアリストテレスか」のような不毛な議論をしていればよかった。古代ギリシャの偉大な先人たちの議論を継承しているインテリというような雰囲気があればよかった。

大航海時代とかルネッサンスを経て近代になると、新しい文化を求める気運が増大してきた。デカルトは

イデア論『世界＝おとぎ話』の賞味期限が切れた

と思った。そして、デカルトは自己言及のコギト命題「我思う、ゆえに我あり」を使って、デカルト哲学 (物心二元論) という世界記述を提案した。すなわち、大雑把に言うと



である。

要するに、世界記述の哲学は前振りなのだから、ちょっとした小話でいいわけだが、そうだとすると、効果的な小話をしたいわけで、結局、ソクラテスの「無知の知 (I know that I know nothing)」を見習って、

デカルトはコギト命題「我思う。故に我あり」という自己言及的トリックを使いたくなった

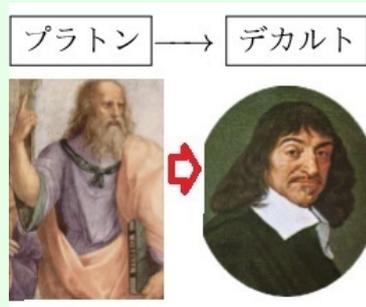
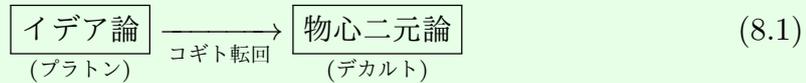
ということだろう。東洋における禅問答と類似のものと思っていいだろう。

最初から述べていることであるが、本書では「二元論・観念論」に限定して哲学を議論する。したがって、デカルトの他の仕事 (たとえば、人間機械論等) についてはかかわらない。

- ◆ 注釈 8.1. 数学・物理学は世界共通の学問であり、ニュートン力学の誕生には大航海時代等のそれなりの理由・伏線がある。しかし、コギト転回 (8.1) など無くてもよかったかもしれない。デカルト＝カントの哲学は、近代の西洋という環境の中で生まれた奇跡的な「ガラパゴス哲学」かもしれない。

## 本節の主問題

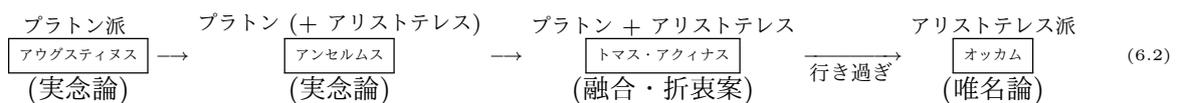
問題 8.1. 次のモデル・チェンジは **進歩か？**



(注): これは難問である. 文学だとすると, テーマが「ファンタジー・童話・神話」から「オカルト・SF・人間中心主義」に変わったようなもので進歩かどうかは簡単でない. 「進歩」と解答する場合には, 二つの理由づけが考えられるが, 一応の解答を本章の最終節 (8.4 節) に書く.

時間経過が進歩を意味するわけではないことは第 6 講 [暗黒時代] で見たとおりである:

すなわち,



で, 一言で説明すれば,

- アウグスティヌスの頃はプラトン派一色だったが, 徐々にアリストテレス派の勢いが増大して, トマス・アキナスの頃は半々となり, オッカム頃にはアリストテレス派が多数派になった

と言える. すなわち, 式 (6.2) はプラトン流からアリストテレス流への推移を表しているだけなのだから,

- 式 (6.2) 内の各  $\rightarrow$  は進歩と解釈するわけにはいかない. 二元論・観念論の明確化という意味だとしたら, むしろ, 退歩であった.

と結論した。

中世の 1000 年以上の間に一步も進化しなかったのだから、もう進歩しないと考えるのが常識だろう。したがって、

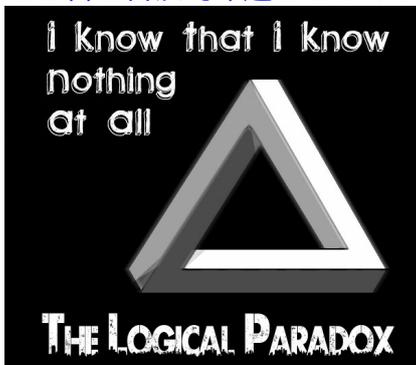
問題 8.1：次のモデル・チェンジは **進歩か？**



も、単純ではない。

## 8.1.2 自己言及的命題

### 8.1.2.1 哲学とは自己言及的命題をこねくり回すこと？



哲学において自己言及的トリックはよく使われるが、これはソクラテスの「無知の知 (I know I know nothing)」以来の伝統である。自己言及的命題 (≈ 反コペンハーゲン解釈的命題) の厳密な定義は知らないが、だいたい、「自分が自分自身を語る命題」のことと思えばよい。たとえば、

- ① クレタの人のエピメニデスが「クレタの人はみなうそつきである」と言った。
- ② 集合すべての集合 (ラッセルのパラドックスで使う「自分自身を要素として含まない集合全体の集合」も自己言及的である)
- ③ 自然数論の無矛盾な理論体系は自分自身に矛盾が無いことを、その理論体系の中で証明できない (ゲーデルの第二不完全性定理)
- ④ 無知の知 (=私は「私が何も知らない」ことを知っている)
- ⑤ 脳内時間 (=主観的時間；脳内時計を脳で感知する)
- ⑥ コギト命題：「我思う、ゆえに我あり」、さらに言うと、『『我思う、ゆえに我あり』と我思う』

等である。自己言及型命題と反コペンハーゲン解釈的命題 (=量子言語で記述できない命題) との関係は著者は明確に理解していないが (cf. 問題 12.3), 自己言及の命題はいつも興味を引き付ける魅力を持っている。哲学で頻出する自己言及の命題は、パズルとして面白いだけでナンセンスな場合がほとんどであるが、数学基礎論 (=数理論理学) で出現する自己言及の命題はゲーデル

の不完全性定理のように人類史上最高級に深淵な問題の場合もある。実は、著者は次のように考えている：

(B<sub>1</sub>) 自己言及的命題は科学的にはナンセンスであるが (数学基礎論 (= 数理論理学) で出現するにしても、科学で使われることはない)、哲学においては「心理的な納得の形式」としてよく使われて、また、文芸的にも楽しめる。たとえば、

「我思う、故に我あり」

などと言われると、「疑う余地のない真理」と納得してしまう。

したがって、

(B<sub>2</sub>) 結論から先に言うと、コギト命題「我思う、ゆえに我あり」をいくらこねくり回しても、無駄である。

「我」、「思う」、「在る」

は、「神」や「善」や「真理」等と同程度に使い方の難しいマジック・ワードである。コギト命題以来今日まで 400 年ぐらい経つが、実のある理論を生産することは一度もなかった。

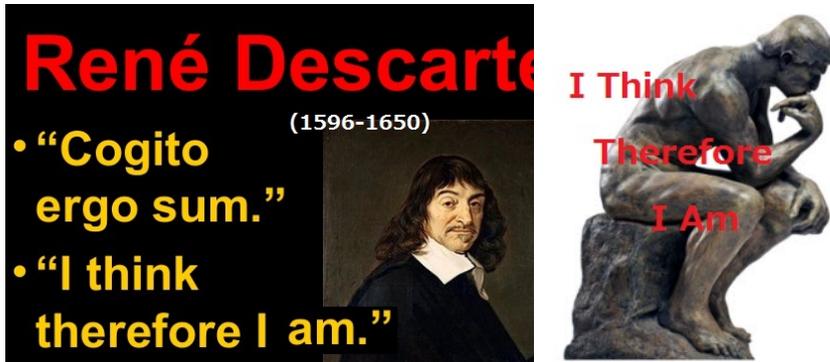
である。この主張の証明を持っているわけではない。しかし、この (B) を信じるならば、

- 近代哲学 (二元論的観念論) の系譜 [デカルト → ... → カント → ... → フッサール] が科学的に生産的でなかった理由とこれが文芸的には十分楽しめた理由

が理解できる。

♠ 注釈 8.2. 本書では、(ゲーデルの不完全性定理のような数学基礎論の命題ではなくて) パズルとして面白いだけの科学的にナンセンスな自己言及の命題に興味がある。3.6 節で述べたように、世界記述の哲学は、文学の一つのジャンル (しかも、「論理もどき」を重視するジャンル) である。したがって、納得を得るための心理的テクニックとして、パズルの自己言及命題が様々な場面で使われるのは当然だろう。ただし、著者は自己言及の命題について整理した理解には至っていないので、本書では「自己言及」という言葉を気分で使っている。

## 8.2 「我思う、ゆえに我あり」と我思う（デカルト『方法序説』）



いよいよデカルト（1596年 - 1650年）の登場である。著作『方法序説（1637年）』の科学史上最も有名な命題（Cogito ergo sum, コギト命題）「我思う、ゆえに我あり」から始めよう。デカルトは、ベーコンの『ノヴム・オルガヌム - 新機関』を読んで、「悪いイドラ（先入観）」に陥らないためには、「疑いの余地の無い命題」からスタートすればよいと安直に考えた。これが、哲学史上最も有名な「コギト命題」：

**我思う、ゆえに我あり**

「我思う、ゆえに我あり」と我は思う

である。そして、ユークリッドを見習って、

- この（疑いの余地の無い）コギト命題から演繹されることは、確実に信用できる

と考えた。すなわち、

## 命題 8.2. 方法的懐疑（哲学の第一原理：コギト命題）

さて、

(A) デカルトはすべてを疑って、疑って、疑いまくった、らしい。そして、どうしても疑う余地がない命題として、コギト命題：

(B) **我思う、ゆえに我あり**

にたどり着いた。そして、このコギト命題（B）を哲学の第一原理と考えた。

である。

しかし、コギト命題「我思う、ゆえに我あり」は疑わしい。

日常言語の中では、そもそも「存在」の意味が明確でない。たとえば、次である：

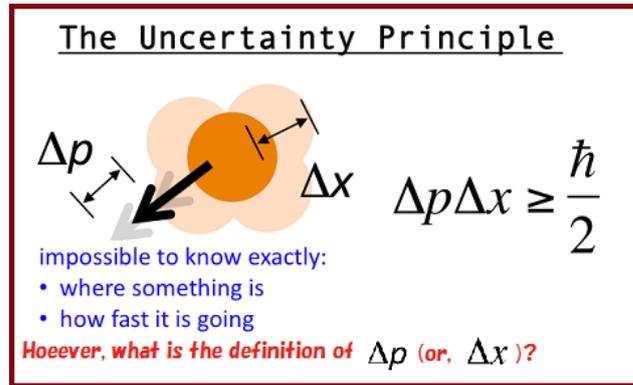
- (a): 太陽って、存在しますか？
- (b): 美って、存在しますか？
- (c): 数学って、存在しますか？（何処に？）
- (d): 愛って、存在しますか？
- (e): ヒッグス粒子って、存在しますか？（「存在」って、科学者が決めることですか？）
- (f): 恐竜って、存在しますか？
- (g): 無って存在しますか？
- (h): 過去って存在しますか？
- (i): 時間って存在しますか？
- (j): 我って存在しますか？

等を考えれば、「存在」の意味の難しさがわかるだろう。

今から思えば、「デカルトの勘違い（「デカルトの意図的勘違い」の可能性大であるが）」は明白である。たとえば、日常言語という言語体系の論理が当てにならないことは、ここまでも何度も以下のように注意している（詳細は文献 [KOARA 2018; コペン] を見よ）。日常言語においては

- ゼノンのパラドックでは飛んでいる矢が止まったり、(cf. 2.4 節)
- アリストテレスの三段論法を無条件に信じてしまったり、(cf. 4.3 節)
- アウグスティヌスの「現在しか無い」(cf. 6.1 節)
- 測定した瞬間に、波動関数が収縮してしまったり (cf. 6.1 節)
- ベルトランパラドックスを深遠なパラドックスと思い込んだり

- アンセルムスは神に存在まで証明してしまったり, (cf. 6.4 節)
- 世界五分前仮説「世界は実は 5 分前 (の過去) に始まったのかもしれない」に惑わされたり (cf. 補足 6.1)
- 天動説と地動説の違いが分からなくなったり, (cf. 第 7 章)
- ハイゼンベルグの不確定性原理 (cf. 文献 [KOARA 2018; コペン] の第 4 講)



等の不都合が生じたからである。

「疑う余地のない命題」とか「自明な命題」などは無いわけで (「自明」の意味も自明でない),

(C) 「疑う余地がない命題」からスタートするという発想で, 成功した理論は無い

と断言できる。ニュートン力学の運動の 3 法則も自明とは言い難いし, 相対性理論も量子力学も自明ではない。ユークリッド幾何学の公準も, 非ユークリッド幾何学 (ガウス (1824 年), ロバチェフスキー (1829 年) 等) と照らし合わせて考えるならば, 自明ではない。数学の選択公理は自明どころか理解しがたい定理 (バナッハ=タルスキーの定理) を導出してしまう。結局, どの場合も,

「自明さ」よりも「生産性」

という観点で選ばれているのである。

(D) 「疑う余地がない命題」からスタートするというデカルトの発想を真に受けた人たちが本当にいたのだろうか?

と疑わざるを得ない。プラトン流の哲学の語り方では, 「世界記述」などはどうせ看板に過ぎないわけで, アイデア論の賞味期限が切れた以上は, コギト命題を看板にしようということ, 祭り上げられただけのことではないだろうか?

♠ 注釈 8.3. 注釈 1.2 で既に述べたことであるが,

(#) 量子言語という言語体系においては、コギト命題「我思う、ゆえに我あり」は意味のある命題ではない。  
すなわち、科学の命題ではない。

なぜならば、言語的コペンハーゲン解釈 (E<sub>1</sub>) (1.1.2 節) では、「測定者」と「測定対象」は分離されていなければならない。しかし、コギト命題では、測定者が「我」でしかも、測定対象も「我」となっていて、上の (E<sub>1</sub>) に反するからである。つまり、「我 (測定対象) 思うこと」も「我 (測定対象) の存在」も我 (測定者) が測定できない。結局

$$\text{【測定者】} = \text{【我】}, \quad \text{【測定対象】} = \text{【我】}$$

のように自己言及的になっているので、コギト命題は量子言語の命題ではない。つまり、コギト命題は疑う余地のない命題どころか、(量子言語の) 命題ですらない。つまり、コギト命題は科学の命題でない (cf. 主張 1.1)。

まとめ 8.3. [コギト命題のまとめ] 混乱しやすいところなので、コギト命題のまとめを以下にしておく。

(E<sub>1</sub>) コギト命題「我思う、ゆえに我あり」は意味不明な自己言及的命題なので (cf. 注釈 8.3), 「我あり」とは言えない。というより、「我あり」の意味すら不明。コギト命題は「疑う余地のない命題もどき」にすぎない。

しかし、

(E<sub>2</sub>) 「方法序説」で、デカルトは意味不明なコギト命題「我思う、ゆえに我あり」を唱えて、読者がこの意味に戸惑っているうちに、「我あり」と宣言してしまって、「我あり」の既成事実を作ってしまった。そして、「我」をデカルト哲学の根源的キーワードに仕立てた。

である。

### 8.3 デカルトの戦略；哲学とはキャッチコピーのこと

スコラ哲学では、プラトンとアリストテレスが混同されてしまった。大航海時代・新大陸発見等の新しい空気の中で、デカルトはプラトンのイデア論を刷新(リニューアル)したかったのだと思う。

さて、

**コギト命題「我思う、ゆえに我あり」は単なるキャッチコピー**

である。もちろん、哲学史上最高に成功したキャッチコピーなのだから、「よくできたキャッチコピー」であることは間違いない。以下にこれを説明する。

デカルト哲学の最重要キーワードは「我(=一人称)」である。しかし、デカルトは、

『我』を発見した

と大声で叫んでも誰も耳を貸してくれないと考えたのだと思う。そこで、[まとめ 8.3]でも書いたように、コギト命題「我思う、ゆえに我あり」をキャッチコピーにすれば、

(A) なるほど、「我」は存在するかも

と、方法序説の読者が納得してくれる、とデカルトは考えたに違いない。ベーコンが「悪いイドラを排除せよ」と言っているのだから、「疑う余地のない命題もどき」からスタートすれば一般受けするだろう。ともかく、コギト命題によって、「デカルトの哲学」において、

(B) 「我」が根源的キーワードである

ことさえ伝わればよいとデカルトは考えたに違いない。そして、結果的にはデカルトの思惑・戦略は見事に的中した。「我(=心)」さえ認めさせてしまえば、我が感じる「物」も在るに違いない。さて、「物」と「心」があったとしても、それらの間を取り持つ「仲介者」がなければ、

- 「物一元論」と「心一元論」の二つの一元論になってしまう

したがって、「仲介者」が必要で、それが、「感覚器(=身体)」である。したがって、デカルト哲学のキーワードは

(C) 「我(脳・心)」, 「身体」, 「物」

の三つである。

物心二元論 (デカルト問題)

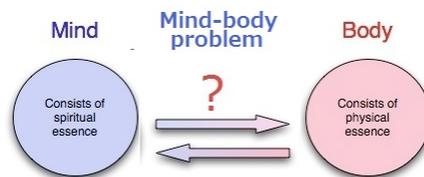
デカルトは三つのキーワード

(D) 「我（脳・心）」, 「身体」, 「物」

をスタートとする物心二元論という空想的言語的世界記述を想起して次のデカルト問題（二元論的観念論を極めること心身問題）を提起をした

#### 問題 8.4. 心身問題

「物」と「心」を繋ぐものとして、「感覚器 (=身体)」があるとして、「心」と「身体」は如何に結びついているのか？



解答: 解答はいたるところでのべるが, 最終的には 11.4 節でまとめて解答する.

#### ◆ 注釈 8.4. 主客問題 (クオリア問題)

- 私が知覚する世界は, あなたが知覚する世界と同じか？  
も有名である. 量子言語の立場で言うと, この主客問題は自己言及的で, 科学的にはナンセンスな問題である. 「我」は科学の対象になり得ない. もちろん, 「彼が知覚する世界は, あなたが知覚する世界と同じか？」は意味を持つ. これがナンセンスだとしたら, 視力検査が意味がないことになる.

要するに,

(E) コギト命題「我思う, ゆえに我あり」は, デカルト哲学 (二元論的観念論?) のキャッチコピーで, デカルト哲学の世界記述の部分は上の物心二元論

となる. コギト命題から物心二元論が導出されるわけではないが, コギト命題はキャッチコピーだから, 意味はどうでもよい, 一般に注目されればよい.

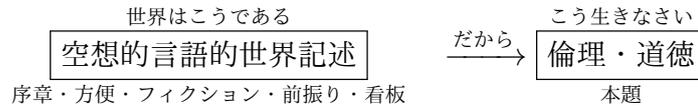
デカルトは次のように考えたかもしれない.

(F) スコラ哲学は消滅したも同然である. 哲学を蘇らすためには, 新たなモデルチェンジをしなければならない. それこそ,

#### 物心二元論

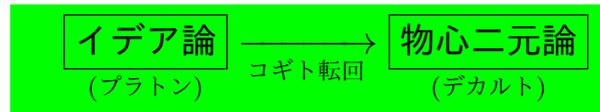
である. これがナンセンス問題だとしても, これで, (脳科学, 人工知能が力を付ける) 400 年後まで, 哲学は安泰だ. 問題解決よりも問題提起の方が偉いのだ. プラトン流の哲学の

語り方：



は世界記述の看板の書き換えでリニューアルできる。

事実, コギト転回：



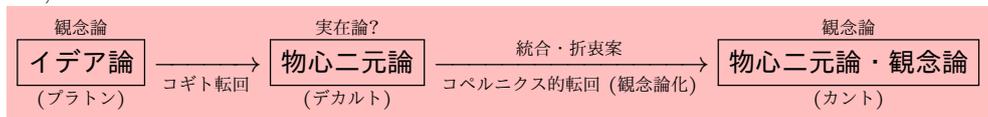
は哲学史上最大の「モデルチェンジ」となった。

もちろん, 我々の関心は,

### このモデルチェンジ (コギト転回) は進歩か？

である。これを次節で答える。

- ◆ 注釈 8.5. デカルト哲学が二元論的観念論であるかどうかは、「？」である。デカルト自身は、实在論だと考えていたかもしれない (実体物心二元論)。ただし、二元論的实在論などは無いわけで、实在論だとするならば「失敗した实在論」である。これを救ったのがカントであり、カントの章で述べることであるが、



であり, デカルト・カント哲学は二元論的観念論である。本講では, デカルト哲学とカント哲学との区切りを曖昧にして, デカルト・カント哲学としてまとめて議論することが多い。

- ◆ 注釈 8.6. 自己言及型問題 (≈ 反コペンハーゲン解釈的問題) には極めて重要なものとナンセンスなものがあって, その見極めの法則を著者は知らない。たとえば, 次も広義の自己言及型問題であるが, 多分, ナンセンス問題と考える。

(#1) 【水槽内の脳】ある宇宙人が水槽の中に犬の脳を浮かべて, その脳の神経細胞を電極を通して刺激しているとしよう。われわれが現実中存在している世界は, 実はこのような水槽の中の脳が刺激されている仮想現実かもしれない

とか,

(#2) クオリア問題, 心の哲学, 「私は何者なのか？」

とか,

(#3) 神の存在証明

(#4) 脳内時間 (=主観的時間; 脳内時計を脳で感知する)

これらは文芸としては楽しめる (実験科学としての脳科学の問題とするならば, 「神を信じる脳回路」とか「心 (クオリア) の脳回路」とか等は重要なテーマである)。

♠ 注釈 8.7. 文献 [KOARA 2018; コペン] 第 6 講で述べたことであるが、次の①–⑦は、量子言語で記述できない命題 (反コペンハーゲン解釈的命題) と考える。

- ①：時制—過去, 現在, 未来 —
- ②：ハイデガーの“世界内存在 (In-der-Welt-sein)”
- ③：測定の測定 (ウィグナーの友人),
- ④：ベルグソンの主観的時間
- ⑤：測定者の時間,
- ⑥：「現在」だけが存在する (アウグスティヌス (354-430))
- ⑦：光速度不変の原理

等がある。ウィトゲンシュタインの言葉通り、すなわち、

(#1) 「私の言語の限界が、私の世界の限界」

(#2) 「語り得ぬことは、沈黙しなければならない」

なのだから、①–⑦の言葉を記述したければ、量子言語とは別の言語を提案しなければならない。事実、⑦を記述するためにアインシュタインは、相対性理論という言語を提案した。著者は、①–⑥はすべて自己言及に関わると思っている。

////

## 8.4 デカルト哲学と量子言語のキーワード対応

デカルト哲学のキーワードは

「我（脳・心）」，「身体」，「物」

の三つであるが，デカルト問題（主客問題，心身問題）に突入しても実質的な成果は期待できない。しかし，この三つのキーワードは量子言語との関連では極めて重要である。以下にこのことを説明しよう。

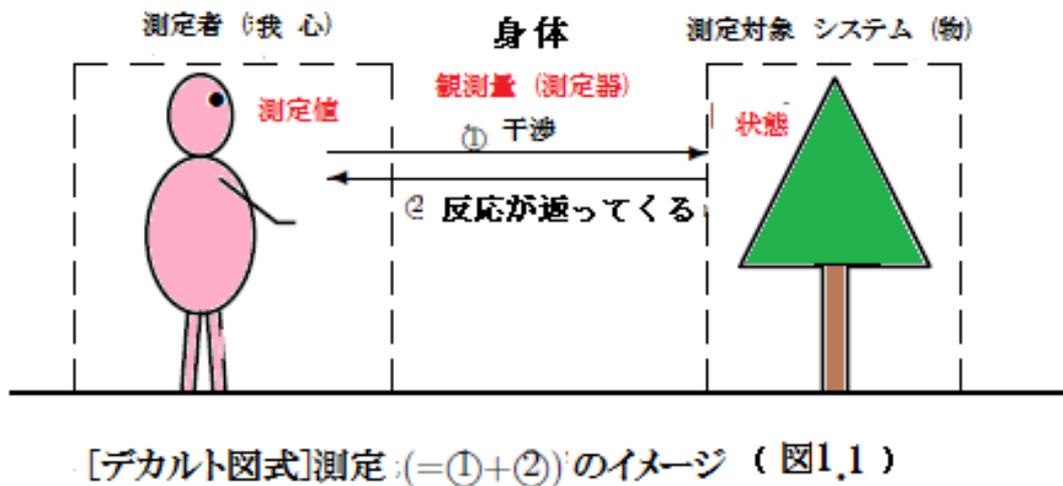


図 8.1 デカルト図式 (=図 1.1)：測定イメージ図 (cf. 文献 [KOARA 2018; コペン] 第3講)

たとえば，風呂のお湯が熱いか冷たいかを手を入れて調べるとしたら，「手」は測定器と思っ  
ていい。「目」も測定器である。逆に言えば，メガネ，顕微鏡，望遠鏡は身体とも言える。そう  
ならば，

身体（特に，感覚器）≡ 測定器

である。デカルト図式で，すこしわかり難いのは，

脳 (=心) ≡ 測定値

かもしれないが，「脳で感知して，初めて測定値と言える」と思えばよい。「脳無くして，測定値

無し」である。たとえば、電圧計の針が振れただけならば、それは物理現象である。この針の振れを読み取って、脳に感知されて初めて「測定値」になる。

もちろん、デカルト（カント）哲学が役に立たない理由は、

(A) 三つのキーワード「心・身・物」がそろったが、計算可能な形式を持たないので、空想的言語的世界記述法に過ぎず、科学的言語的世界記述法の体をなしていない

からである。しかし、次の対応表を使えば役に立つように変貌させることができる。

表 8.1 世界記述法のキーワード (cf. 主張 1.5)

|      |          |            |                |
|------|----------|------------|----------------|
| プラトン | 現実界      | アイデア       | /<br>[ ]       |
| デカルト | 我, 心, 脳  | 身体         | /<br>[物]       |
| 統計学  | サンプル確率空間 | /          | パラメータ<br>[母集団] |
| 量子言語 | 測定値      | 観測量 (=測定器) | 状態<br>[システム]   |

すなわち、次の言い換えによって、量子言語 (=測定理論) という世界記述法に変貌させれば、非常に役に立つ。

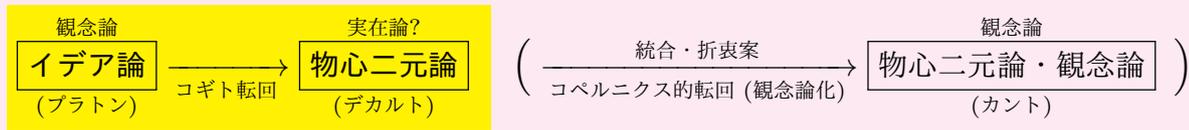
【心】 ⇒ 【測定値】 , 【身】 ⇒ 【測定器】 , 【物】 ⇒ 【測定対象】

これによって、役に立つ科学的な二元論的観念論 (量子言語) に移行できる。もしそうならば、問題 8.5 「デカルトの示した方向は進歩か？」に肯定的に答えられる可能性が大になる。

そうだとすると、次の問題は「二元論的観念論 (= 二元論的形而上学)」において最重要である。

問題 8.5. [進歩問題]

デカルトが指示した方向である次のモデルチェンジ (コギト転回) :



は二元論的観念論として進歩と言えるのか？

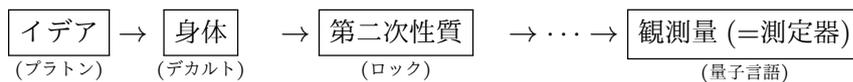
注): デカルト哲学は二元論的観念論でなくて、二元論的实在論というのがデカルトの真意かもしれないが、それでは話がややこしくなるので、ここでは、デカルト哲学は二元論的観念論として話をすすめる。デカルト哲学は結局コペルニクスの転回を経てカント哲学に吸収されて、二元論的観念論になるのだから些細なことに拘らない。

デカルト哲学は一般には支持されたけれど、それはファッション的な意味で人気が出ただけなのか？ それとも、物理学におけるニュートン力学のような本質的な進歩なのか？ 同じことであるが、

- 二元論的観念論は文芸的に楽しむだけではなくて、そもそも研究するに値するのだろうか？



解答：「本質的な進歩あり」が本書の結論であるが (11.4 節で総括する), この理由は、たとえば、1.4 節の主張 1.5 で述べたように、



と

キーワードが徐々に最終到達点である測定器 (in 量子言語) に近づいている

からであるが、詳細は本書全編で述べることになる。最終到達点 (科学的に役に立つ理論) が宣

言われていなければ、文学のようなもので、「進歩か？ファッションの人気か？」は決着が付かないことに注意せよ。

////

### 8.4.1 デカルトは何をやったか？

「まえがき」でも書いたように、本講の論法はすべて「量子言語」からの逆算である。すなわち、

- 「量子言語が二元論・観念論のお手本とする」ならば、〇〇理論は二元論・観念論と見なせるか？

と考える。そうだとすると、やはり、デカルトと言えば、「我思う。故に我あり」である。すなわち、

- 二元論 (測定者, 測定器, 測定対象) の内で、『二元論 (我 (=測定者))』の発見はデカルトに帰す

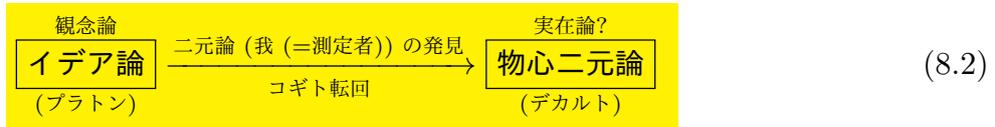
と結論する。二元論と言ってもいろいろあるわけであるが、

- **デカルトの二元論 (我, 心身 (感覚器), 物) は、測定 (測定者, 測定器, 測定対象) にかなり近い**

と考える。したがって、いまのところ、次のデカルト [『我 (測定者)』の発見 (=二元論の発見)] を得た。



すなわち、コギト転回によって、「多少なりとも量子言語に近づいた」わけなので、



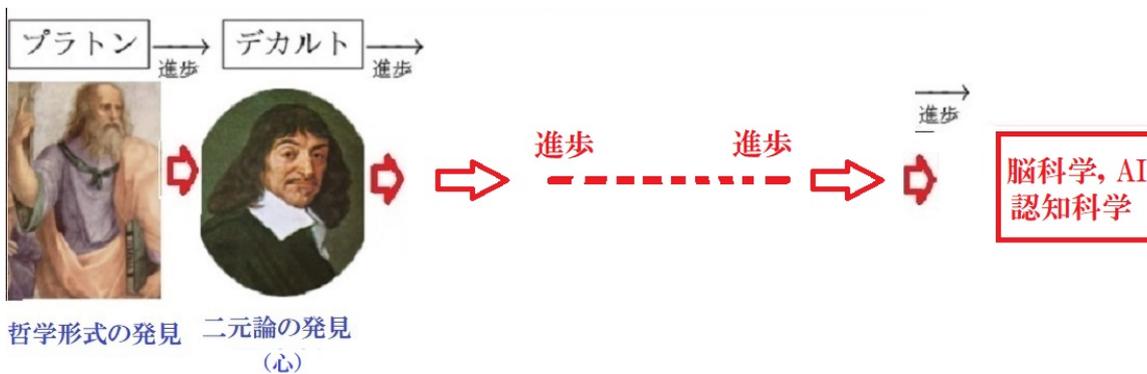
**は進歩だった**

と結論したい。

### 8.4.1.1 別の考えもある；脳科学

上の論法で、「量子言語」を「脳科学」に置き換えるとどうなるだろうか？

すなわち、次の進歩を考える：



そうならば、コギト転回によって、「多少なりとも脳科学に近づいた」わけなので、



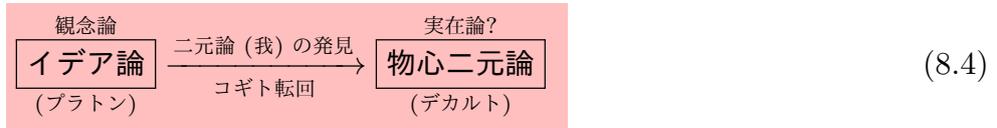
**は進歩だった**

と結論できるとも言える。

まとめると、デカルト哲学には二つの可能性があって、つまり

デカルト哲学の行き先 (目標) { 量子言語  
脳科学

であり、「量子言語行 (8.2)」でも「脳科学行 (8.3)」のいずれも



## は進歩だった

と結論できてしまう。もちろん、これは

デカルトはいい加減なことしか言っていないので、如何様にも解釈できる

わけで、次章からのデカルト以降の議論を待たなくてはどちらとも結論できない。